

願いを込めて――

十郎原・日桂神社 弓引き祭り



放たれる矢の行方を見守る人たち

大将の衣装を着けた大路慎治さん（左）を見守る閑さん。父親の雅美さんは猿田彦をつとめた。射手は猿田彦に惑わされず、集中して矢を放たなければならない。



げんぞ詣りで玉ぐしを捧げ、神様に結婚を報告する大路さん夫妻



大将役の大路慎治さんの号令で2人の足軽が矢を放った。

弓矢の音が 春を告げる

十郎原の日桂神社で4月3日、「弓引きまつり」が行われた。今年は祭りにあわせて「げんぞ詣り」もあった。げんぞ詣りは漢字で「見参」と書く。新たに神社の氏子となったことを報告する儀式で、2月に結婚した大路慎治さんと閑さん夫妻が拝殿で玉ぐしをささげた。この地区でのげんぞ詣りは約20年ぶりとなる。

弓引き祭りでは大路慎治さんが大将を務めた。集会場であつて甲冑を身につけ、拝殿で神事に臨んだ。水田に場所を移し、太鼓が打ち鳴らされる中、足軽役の2人の氏子に「放て」と号令をかけ、田に向かって矢を放った。

境内に戻り、今度は的を狙う。的の直径は約30センチで、矢が中心に近いほどその年は豊作になるといわれる。

大将から順に矢を射るが、風が強かったこともあってベテランの氏子や神職も手こずり、1巡目は誰も命中させることができなかった。多くの人が注目する2巡目、大将が放った矢は見事に命中。見守っていた氏子やカメラマンから、ようやく安堵と喜びの声が上がった。

災いの象徴 「猿鬼」を退治

住神社の春祭りは3月29日に行われた。今年は都合により日程が変更されて、例年より1日遅い開催となった。拝殿には氏子ら約20人が集まった。

神事に続いて、拝殿から赤鬼が描かれたのが運び出され、境内に立てられた。赤鬼は災いを象徴する「猿鬼」をあらわす。神職と氏子が、竹でつくられた手作りの弓で次々と的を狙った。小学生は春休み。近くの親戚に遊びに来ていたという子どもも参加し、大人の手を借りて弓を引いて的を狙っていた。放たれた矢は次々と赤鬼の目を射抜き、命中するたびに見物人から拍手が起こった。

拝殿に戻ってからは「花祭り」が行われた。氏子らが梅の枝を両手に持ち、太鼓の音にあわせて即興でユーモラスな踊りを見せる。この踊りは猿鬼を退治した喜びを表すといわれるもので、手拍子と笑い声が響いた。

踊りを終えると、大きさ約5センチほどのひし餅がまかれた。集まった人たちは競って餅を拾い、笑顔で無病息災と豊作を願った。



約10メートル先の的に向かって、神職と氏子が矢を放った。



拝殿で行われた「花祭り」。子どもたちもはにかみながら即興で喜びの舞を踊った。



▲鬼の目に見事命中

祭りの最後にはひし餅がまかれた。



嫁ぐ時いつか読もうと持ってたきし

谷崎源氏は開かぬままに

干場吉子

干場吉子さん（上町）の短歌作品が平成25年度NHK全国短歌大会で特選に選ばれました。作品が生まれた「あじさい短歌会」の活動場所にお伺いしました。

NHK全国短歌大会は全国の愛好家が目標とする大会で、今回は2万4千515首の応募がありました。表彰式は1月18日、東京・渋谷のNHKホールで行われ、特選作品の45首は作者とともに1首ずつ紹介されて、その模様が全国に放送されました。

題材になったのは谷崎潤一郎訳の源氏物語です。干場さんの家に片づけられている11巻の源氏物語に対して抱く、さまざまな気持ちが表現されています。

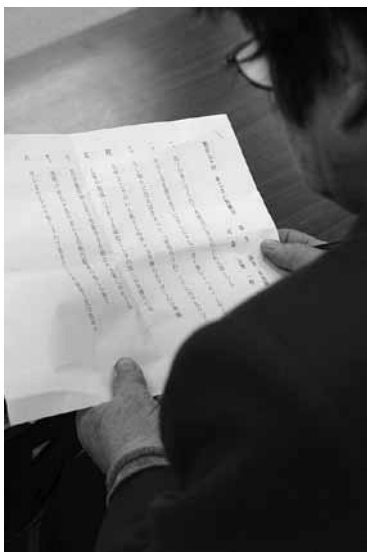
干場さんが活動している「あじさい短歌会」は毎月17日に寺分の寺五集会場で活動しています。集会場は「あじさい寺」として知られる平等寺の近く。会は寺分に住む人



【写真上】短歌会の様子。お菓子などを持ちよって楽しい雰囲気で行われている。

【右】毎月末までに自由詠と課題詠各1首を報告、一枚の紙にまとめて歌会当日配布する。

【下】賞状を手にする干場さん（中央）とあじさい短歌会のメンバー。



を中心に構成されています。あじさい短歌会は生涯学習の一環として始められました。主宰したのは柳田村教育委員長も務めた寺分の野口芙美さん（現在は富山市在住）です。平成10年に現在の形態での活動が始まりました。今年4月の歌会で190回目を数えます。

それぞれの仕事を終えた午後7時、8人の会員が集会場に集まり歌会が始まりました。干場さんの受賞について、ほかの会員は「活動の励みになる」と話し、同じ会に所属する仲間の受賞を喜んでいました。

歌会では自由詠と課題詠のあわせて2首を作り、名前を

伏せた状態で配布します。それを順に読み上げ、参加者がそれぞれ批評や共感など、さまざまな感想を述べます。農作業ですっかり疲れた身体のこと、テレビで見た花の姿など、日常にある身近な風景や時には肉親を亡くしたときの心情が詠み込まれ、まるで自分が体験した出来事であるかのように感じられます。

4月の課題は「桜」。今年一年は花を題材にした課題を予定しているそうです。歌の締め切りは月末。桜が咲く前の3月に歌を詠まなければならぬため、イメージを具体化するのに苦労したようで、20年以上前の記憶の中の桜やひと足早く咲いたヤマザクラ

の歌が発表されました。歌を詠んだ人からは「ひそかに咲いている様子を表現したい」「やさしいピンク色を表現したい」などの希望があげられました。記憶を頼りにして詠んだもののほど、伝えたい思いが強くなるようです。

過去の記憶だけではなく、桜峠に向かう珠洲道路沿いの桜並木が成長した姿を思い浮かべた作品もありました。参加者は過去や未来を自由自在に行き来して、言葉の可能性を楽しみました。

午後8時すぎ「また来月会いましょう」というあいさつで歌会は終了。楽しいひとときはあつという間に過ぎていきます。



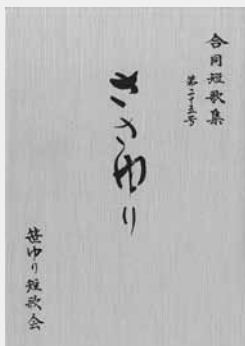
短歌大会の入選作品集。干場さんの作品のほか、町内のほかの応募者の入選作品も掲載されている。



和倉温泉短歌大会（平成25年9月12日）に参加した笹ゆり短歌会、花椿短歌会、あじさい短歌会のメンバー

あなたも参加してみませんか
能登町で活動する短歌会をご紹介します（能登町文化協会加入団体）

名称	会員数	活動日	活動場所	その他
笹ゆり短歌会	11人	毎月 第3土曜日	上町公民館	昭和56年6月に設立。合同短歌集「ささゆり」をこれまでに25号発行している。 ☎上町公民館 ☎ 76-0249
能登短歌会	7人	毎月 第3木曜日	宇出津公民館	公民館の短歌会として誕生して以来、45年以上の活動歴をもつ。 ☎宇出津公民館 ☎ 62-3458
花椿短歌会	9人	毎月 第3土曜日	柳田公民館	平成22年に設立した、新しい短歌会。初心者も気軽に参加できる。 ☎柳田公民館 ☎ 76-0313



平成26年3月に刊行した「ささゆり」第25号



花椿短歌会の歌集「花椿」。現在、第4集を編集集中

「知徳体」の伝統を受け継ぎ、 地域に支えられ愛されてきた学校

平成 17 年に初めて鶴川中学校に赴任し、教頭として 3 年間、校長として 2 年間お世話になりました。当時は瑞穂中学校の生徒を受け入れる側の立場でしたが、再びこの学校に校長として、今度は能都中学校との統合で送り出す側になるということは想像もしていませんでした。鶴川地区が輩出した「知徳体」を代表する三偉人「原勤堂」「久田佐助」「阿武松緑之助」の一人、久田佐助船長に関わる内容は鶴川中学校の校歌の一節にも盛り込まれており、歴代の鶴川中学校生徒たちに「徳」の大切さが受け継がれてきました。私もその伝統を受け継ぎ、「知徳体」の調和のとれた健全な生徒の育成のために地域と連携した教育活動を心掛けてきました。閉校を聞いた時は、やるせない思いと仕方がないという気持ちでした。最終年として 25 年度は「67 年間の歴史と伝統に感謝を込めて、有終の美を飾ろう」と生徒に呼び掛け、生徒たちもまたそれぞれに応えてくれたと思っています。

地域に支えられ、地域の学校として愛されてきた鶴川中学校が閉校になることに、地域や卒業生の方々の無念な気持ちは察して余りあるものがありますが、学校がなくなってもこの校舎で過ごした思い出は心の中に永遠に残り続けるものと確信しています。

最終年度、1、2 年生は能都中学校との交流活動を何回か行ってきました。生徒たちの新しい環境への不安はまだまだ大きいと思いますが、この統合を発展的にとらえ、本年度以降も、生徒たちがより充実した教育環境のもとで生き生きと中学校生活を送ってくれることを願っています。



鶴川中学校 第 21 代校長
松谷太嘉良 先生



鶴川中学校閉校記念式典事業
実行委員会

河合元一 委員長

「鶴川中学校が閉校になる」。まさかこんなに早くその日が来るとは思ってもいませんでした。私の同級生（第 10 回卒業生）は 70 人近く、2 クラスありました。当時は、学校に体育館が無く、二つの教室の間仕切りをはずして、体育の授業や卒業式もしました。当時の日本の世相と同様、活気にあふれていました。当時の橋本秀春校長先生は生徒とテニスをするのが好きな方で、授業が終わる頃、腰に手拭いをぶら下げ、ラケットを持って生徒たちを中央玄関で待っている姿は、鶴川中の名物でした。学校の裏山の田や畑で野良仕事授業をしたことや、大雨で裏山の崖崩れが起こり、校舎内から泥出しをしたことも懐かしい思い出です。

学業優秀・スポーツ優秀だった当校は、「能登に鶴川中学校あり」と言われるほど有名になった頃もあったそうです。そんな卒業生の皆さんが、県内外の各界で立派に活躍されていることは、生徒たちの弛まない努力と、先生方の熱心な指導、保護者や地域の皆さんの支え、それぞれが学校の運営に惜しみない力を尽くしたからであり、そこが鶴川中学校の良いところだと思っています。

閉校の日は、鶴川中学校の生徒たちが、新しい環境でより多くの友人と交わるための旅立ちの日でもあります。能都中学校へ行っても鶴川中で学んだことを忘れずに、勉学に、スポーツに励んでほしいと思います。地域の皆さんには、これまでとは異なる環境で頑張る子どもたちを見守り、これまで以上に支えていただきますようお願いいたします。



鶴川中学校校歌
作詞 中田孝次
作曲 吉島喜三郎

北海の新潮寄せる一角に
緑の丘を 背に負いて
わが学舎は たてるなり
高鳴る胸に 夢抱き
緋く書ぞ この庭に
我らが理想 掲げなん

風薫る田の面広らに稲の穂の
実りし姿 潔く
清きを己が 身にしめて
港頭輝く 石碑を
心の則と 仰ぎつつ
真理の道に いそしまん

六七年間の
歴史と伝統に
感謝をこめて

鶴川中学校
閉校式



スライドを見つめる教職員と生徒



七見地区の獅子舞は鶴川中学校開校時にも披露された



恩師の山田良憲さん（左）と記念撮影する卒業生たち

鶴川中学校閉校記念式典は 3 月 30 日、同校体育館で挙行されました。式典には学校関係者のほか、卒業生や地域住民など約 300 人が出席。親しんだ母校での最後の思い出を胸に刻みました。

鶴川中学校は昭和 22（1947）年、元鶴川町立青年学校校舎を利用し、鶴川町立鶴川中学校として開校。昭和 28 年に瑞穂・宮地の各中学校と統合し、昭和 54 年には鉄筋の新校舎が完成しました。ソフトテニスでは県内屈指の強豪校として知られるなど、多くの人材を育み、これまで 3869 人の卒業生を送り出しました。過疎化や少子化で生徒数が減少し、平成

25 年度の生徒数は 40 人。本年 4 月から能都中学校と統合することになりました。

午前 9 時から行われた式典では、仲谷由美教育委員長が告示、河合元一実行委員長が式辞を述べ、松谷太嘉良校長、持木一茂町長、宮田勝三議長が挨拶しました。生徒を代表し、2 年生の久山隆希さんが「何事にも協力し、自分たちでつくりあげていく鶴川中魂を広めて、新しい校風をつくっていきます」と力強く誓いました。卒業生や地域の人、教職員らと一緒に校歌を斉唱し、2 年生の中田悠斗さんと牧絢音さんが中口憲治教育長に校旗を返納しました。

山田良憲式典部長の挨拶

で始まった式典終了後の「閉校の集い」では、思い出のスライドが上映されました。これまでの鶴川中学校卒業生から 25 年度の在校生までが映し出され、会場の皆さんは自分たちが在籍した時代を懐かしそうに見入っていました。鶴川の情景をうたった民謡「鶴川いずも節」が披露されると、合いの手の手拍子が会場いっぱいに響きました。式が進むとともに雨音が大きくなり、最後は生徒全員で合唱し、思い出が詰まった校舎との最後の別れを惜しましました。



閉校記念誌「五常の徳」

内浦保育所 38年の歴史に幕

児童数の減少により、内浦保育所（布浦）が平成25年度をもって閉所になり、3月28日に閉所式が行われました。地域の人に支えられた保育所は惜しまれながら最後の春を迎えました。

3月28日、内浦保育所の修了式・閉所式が行われました。今年度修了を迎えたのは5人です。竹橋澄子所長から修了証書を受け取るとお母さんの前に進み「育ててくれてありがとうございます」と感謝の言葉をかけました。修了児以外の7人に

は保育証書が渡されました。閉所式では設立からの懐かしい写真がスライドショーで紹介されました。修了児の保護者の中には保育所開設時に園児だった人もいて、写し出された幼い自分の姿に驚き、懐かしんでいるようでした。



保育所開設時からの思い出の写真が投影され、当時を懐かしんだ。



修了児は保育所への感謝を込めて、手話を交えた歌を披露

内浦保育所設立時に保育士として勤務した 長田とも子さん（清真）

昭和50年、保育士になって初めて働いたのが内浦第二保育所（当時）です。子どもが急に増えたため、地域の要望で急いで設置された保育所でした。

1年目は鹿泊の漁港の荷さばき所を改装した仮園舎で、建物はホールを兼ねた広間と畳の部屋だけ。小さな洗い場があるほかはトイレも仮設で、地域の人には花壇の整備など運営にも大きな協力をいただきました。遊具も積み木など簡単なものしかなく、約30人の園児とは、イチゴ畑や海辺をよく散歩しました。

散歩の時にも多くの人が声をかけてくれて、地域の人から愛情いっぱい育てられた保育所でした。



ロータリー会員が加賀市から運んできた稚魚。バケツの中で活発に泳ぎ回っていた。

能都ロータリークラブ（三宅寛会長）は4月17日、山田川支流の宮地川でヤマメの稚魚5,000匹を放流しました。稚魚はロータリークラブ会員が加賀市の県内水面水産総合センターから運んできたものです。ヤマメ放流は今年で31回目です。会員約20人と能登高校地域創造科水産コースの2～3年の生徒11人が参加しました。

宮地川では、大きさ5センチほどの稚魚をビニール袋からバケツに移しかえて放流しました。生徒は「頑張って大きくなれよ」などと声をかけながらバケツを傾けていました。

ヤマメは水温の低い溪流でしか生息することができません。水生昆虫や落下昆虫を餌とするため、生存には多様な生物環境が必要です。ヤマメの生存は里山の環境の指標の一つです。

人間と自然の良い関係づくり

ロータリークラブなどがヤマメ稚魚放流

不動寺みどりの少年団長・吉村隼くんの合図で一斉にヤマメを放流した。



内浦ロータリークラブ（椿原安弘会長）は不動寺みどりの少年団と共にヤマメの稚魚を放流しました。この取り組みは能登の世界農業遺産登録を受け、昨年からは始められたものです。不動寺みどりの少年団は、不動寺地区を中心とした小学4～6年生で構成されていて、今年度の団員は8人です。末次城趾と珪化木公園での植樹や下草刈り、緑の羽根募金活動など、自然を守り親しむ活動を続けています。不動寺公民館と団員の保護者による育成会により支えられていて、このほかにもキャンプやリング狩りなど、年間を通じてさまざまな行事を行っています。

不動寺公民館前で行われた開会式で、椿原会長は「きれいなふるさと里山を守っていききたい」と話し、団員らに協力を呼びかけました。会員の室谷信子さんはヤマメの生態について説明し「人間も自然とより良い関係でいたい」と里山を守る大切さを伝えました。

この日は内浦ロータリークラブから2,500匹、山口みどりの里保存会から1,000匹の稚魚が提供され、九里川尻川支流・平瀬川ダム上流に放流しました。放流した稚魚が流れに逆らって泳ぐ様子を、参加者は目を細めて眺めていました。

海岸清掃にご参加ください

県内一斉に各地の海岸で清掃活動を実施する「クリーン・ビーチいしかわ in のとちょう」が、今年も実施されます。能登の美しい里海を守るため、町民の皆さんのご協力をよろしくお願いします。

〈日時〉5月25日(日) 7:00～ 〈場所〉恋路海岸（旧海水浴場）、五色ヶ浜海水浴場、羽根海岸（旧海水浴場）

問 農林水産課 ☎ 76-8302